

介護等体験実習 の報告

介護等体験実習で学んだこと

竹本 航
(国際言語・文化学科3年)

小中学校の教員免許を取得するには特別支援学校2日、社会福祉施設5日の介護等体験実習を行わなければなりません。

私が実習に行かせていただいた特別養護老人ホームは要介護度の平均が4.2と非常に高く、ほとんどの方が認知症を患っていました。認知症の症状は様々で、「100人の患者さんがいれば100通りの症状がある。」程だと言います。恥ずかしい話ですが、実習に行くまで私は認知症について「物忘れが激しくなり、家族や自分のことまで忘れてしまう病気」という程度の知識しか持っておらず、突然大声を出したり、同じことを何度も繰り返したり、職員の腕をつねったりしている利用者さんを見たときはとても驚き、どう接してよいかわからなくなりました。その時施設の職員さんに「認知症のケアは、その人の個性を見ることが大切。その人は何が好きで、何が嫌いで、どんな人生を歩んできたのかを知り、その人に合わせたケアをしていくんだよ。」と言われ、そこからはとにかく利用者さんの話を聞き、個人個人と向き合うことに全力を尽くしました。個性を知り、それぞれに合った対応をしていく事は教師を目指す者にも絶対必要な能力であり、それがいかに大切かということに気づくことができました。

この施設ではもう一つ、「食事介助」という貴重な経験ができました。上記にも述べた通りこの施設は要介護度の平均が高く、食事をとるのに介助を必要としている方が大勢いました。嚥下の確認、食べさせるタイミング、自分だったら次は何のおかずが食べたいか、など食事介助の時に気を付ける事はたくさんあり、しかも体力の衰えている人は途中で

まったく食べなくなったりするので、実際やってみるととても難しかったです。食事介助に関しては私の中である葛藤がありました。それは「いくら食べる力が弱っているとはいえ、粉々に切り刻んだ食品やドロドロのペースト状になった食品を無理矢理に食べさせて良いのだろうか」という葛藤です。実際に薬剤を使ってとろみをつけたコーヒーを飲ませてもらいましたが、とてもおいしいとは言えませんでした。このような食事を利用者さんの口に運ぶたびに私は申し訳ない気持ちでいっぱいになりました。

こうして5日間、特別養護老人ホームで過ごしました。その中でたくさんの利用者さんに「先生目指してがんばって!」という言葉をかけてもらい、人が人を思いやることの素晴らしさ、大切さを学び、葛藤もありましたが、どれも本当にいい経験でした。この経験を忘れずにこれからも頑張っていきたいと思います。

「子どもの環境」としての教師

分 藤 由希子
(人間関係学科3年)

私は、高等学校教諭一種免許状(福祉)の取得を目指し、教職課程を履修しています。高校福祉の教員免許状取得のためには、社会福祉援助実習及び社会福祉施設における介護実習を含む社会福祉総合実習に臨むことが必要となります。特に、私は高校福祉の教員免許状の取得を目指しているので、高齢者や障がい者の方との関わりは大切だと感じており、その実習から何が学べるのか楽しみでした。一方で、高齢者や障がい者の方とうまくコミュニケーションをとれるかどうか不安で一杯でした。

社会福祉施設の実習では、デイサービスにて比較的自立した利用者の方との関わりを持ちました。初日は、施設の環境に慣れることに必死でしたが、2日目から徐々に利用者の方が笑顔で自分に声を掛けてくださるようになり、私自身も自然と笑顔で接する事ができ、一緒に楽しい時間を共有出来たことで、

実習前に抱いていた不安が消えて、楽しく実習に臨むことができるようになりました。

「資格はきちんと取っておいた方が良い」との利用者の方の言葉がとても印象に残っています。なぜなら、年齢を重ねられ経験を積まれたからこそ言える重みのある言葉だからです。大学で学ぶ機会、その一瞬一瞬を大切にせよ、といったメッセージが脳裏に浮かび、免許状の取得に対する私の意志はより強固なものとなりました。

そして、自分が実習に臨む中で、励みになったのは、職員の方から笑顔で言われた何気ない「お疲れ様」の一言でした。実習生である私は、職員の方から指示のあったことに取り組んでいました。職員の方は、私が一つ作業を終える毎に「お疲れ様」と声をかけて下さいました。そのことで、職員の方との距離が縮まり、信頼関係が生まれ、自分自身が施設の一員（利用者の方の環境）のように感じるようになりました。そして、実習生の私でも利用者の方のためにもっと何か出来る事は無いかと考えて行動することができるようになりました。と同時に、実習生の私に対して「お疲れ様」と声をかけてくださる心遣いは、利用者の方に対する心遣い、ひいては利用者と職員の方との信頼関係の形成や、よりよい環境づくりに繋がっているのではないかと考えさせられました。

特別支援学校の実習は、2日間という短い時間のため社会福祉施設の時のように徐々に学ぶという時間的な猶予がない、という点で不安でした。しかし、特別支援学校での2日間の実習は、とても貴重な体験となりました。私が担当したクラスは、小学三年生の男の子が一人で授業を受けていました。初めは、彼も緊張した面持ちでしたが、私も、緊張して話かけられずに終わったら実習は何の意味もなせずに終わってしまうと感じ、まず、笑顔で積極的に話しかける事を心がけました。すると、彼と一緒に時間を過ごしていく中で、徐々に彼から輝く笑顔を見る事が出来て、純粹に彼と過ごす時間が楽しいと感じました。また、彼の担任の先生からは、彼の障がいや授業に使う特殊な器具の説明などのお話を

聞く事が出来ました。先生がおっしゃっていた事で印象的だったのは、「彼は、学校を休んだ事が無く、いつも楽しいと言って学校に来ているんだよ」という一言でした。実際に、彼が笑顔で先生に話しかけている場面を何度も見ることもあり、教師は、子どもとのコミュニケーションを楽しみながら、児童・生徒をしっかりと観察することが大切であると感じました。また改めて、学校を楽しみと思える雰囲気づくりの重要性、子どもが学べる場所を作ることの大切さを学ぶことが出来ました。

社会福祉施設、特別支援学校での実習を通じて、教師はいかにあるべきかについて私は次のように考えることができました。

一つには、児童生徒に人との関わり大切さを伝える教師。人との関わり大切さは、家庭で教えるべきことかもしれませんが「モンスター・ペアレンツ」に象徴されるように学校や教師に対して過度の要求を突きつけるケースもあります。その場合、子どもは人との関わり大切さを家庭から学ぶことは難しいでしょう。当たり前と思えることも学校教育で伝えていかなければならないと思います。

二つには、児童・生徒が毎日学校に来たいと思う環境づくりにおいて自ら何が出来るのかということを考え続ける教師。社会福祉施設を利用される方の環境は、職員、利用者、そして実習生の私、といった三者の相互の関係の中でつくられています。特別支援学校の児童生徒の環境は、教師、児童、そして実習生の私、といった三者の相互関係の中でつくられています。まさに教師自身が児童生徒の環境を構成しているのです。このことへの深い理解を持ってより良い環境づくりに努めることが教師にとって大切なことだと思います。そして、おそらくこれらの延長線上に理想の教師の在り方が見えてくるのだと思います。